

プラド美術館にて ——死を思え——

——「美の王宮」に出会う——

プラド美術館で、わたしは、蒼ざめた馬に乗った死神に出会った。

日本企業のマドリードの子会社の監査に意外に手間取り、ようやく暇ができたのは土曜日の午後だった。市内見物をしようか、と考えていると、同行した渡辺監査役が「プラド美術館でも行つたらいかがですか」と勧める。渡辺監査役は、イギリスとスイスに長年住んでいたことがあり、ヨーロッパには詳しい。

今までも海外出張を利用してよく英、米、仏、蘭などの美術館は見てまわったが、「プラド美術館」とは初めて聞く。「ルーヴルやオルセーやテート・ギャラリーには到底及ばないだろう」とは思ったものの、ホテルから歩いていける距離なのでぞいてみることにした。

ホテルから南へ続くレコレートス散策路、プラド散策路を経て白亜のプラド美術館に至る。あまり期待していなかったプラド美術館だったが、展示室に入ってすぐ、わたしは作品の水準の高さにたちまち魅せられた。プラド美術館は19世紀初めに王立絵画館として設立され、今ではルーヴル美術館、エルミタージュ美術館に並ぶ世界有数の収蔵品を誇るという。

2階がスペイン絵画を中心としたメインフロアで、スペインの誇る三大巨匠の絵、ゴヤの『裸のマハ』、グレコの『聖三位一体』、ベラスケスの『ラス・メニーナス』などが展示されている。

だが、強烈な印象を受けたのは、むしろわたしにはなじみのない画家たちの絵だった。

11世紀の聖人ドミンゴを描いた『修道院長になったシロスの聖ドミンゴ』（バルトロメ・ベルメッホ作）は、背景には金粉を使い、正装した大僧正が玉座に腰掛けている様を真正面から描ききっている。神への搖るぎない信念を奉じ続けた人物の威厳が迫ってくる。

『英國のメアリー・テューダー女王』（アントン・ヴァン・ダスホルスト・モール作）も「残酷なメアリー」（ブラッディ・メアリー）の尊大さと苦痛に満ちた人生を描ききつてあますところがない。右手に王朝のシンボルの赤い薔薇を持ち、やや左斜めに椅子に深く座り、人を寄せ付けがたい激しい視線を投げつけている。これは肖像画の最高レベルの作品であろう。

どの絵にも深い精神性が感じられ、わたしは次の展示室へ移動しながら、また元の部屋に戻って作品を見直すといったことを繰り返した。いつもは足早に駆け抜けるわたしにしては珍しいことだった。

多くの作品を見るにつれ、プラド美術館はまさに「美の王宮」であると知った。これほどのチャンスを見逃す手はない。市内観光はやめにして、門限までここでじっくり画家たちとの対話を続けることにした。

——死神は蒼ざめた馬に乗って——

数多くの作品の中でわたしが最も衝撃を受けたのは、人生のはかなさ（＝死の勝利）を描いた作品群であった。

ピーター・ブリューゲルの『死の勝利』を見たとき、はじめわたしは戦争画の一つかと思い、通り過ぎるところだった。

だが、ふと痩せ馬に乗った骸骨と荷車に積んだしやれこうべが目にとまった。中央には痩せ馬に乗った骸骨が大きな鎌を持って人を追い立て、人々は恐怖におののいて逃げまどう。その逃げる先には死の世界が大きな口を開けて待っている……。その異様さにわたしは立ち止まった。

おそろしい世界の終末である。カンバスいっぱいに荒涼たる赤土の丘が広がり、火事の黒い煙が空を埋め尽くし、生者は不安におののく。草木もない禿げ上がった大地には死者が横たわる。犬が死体を喰いあさる。

骸骨は隊列を組んで生者を襲う。棺桶から這い出して人を襲い、絞め殺す。圧倒的な死の前に人はなすべくもなくひれ伏す。絶望と虚無と暗黒が世界を支配する。

聖書は「蒼ざめた馬ありて、これに乗るもの名を死という」（ヨハネ黙示録6章8節）という。痩せ馬に乗った骸骨は死神だったのだ。

中世末期、ヨーロッパに黒死病（ペスト）が蔓延した。地域によって死亡率は60%、70%に達し、都市は完全に崩壊した。肉親の間さえも愛情や信頼は失われ、人間性は崩壊した。葬儀もなく、弔鐘もならず、死体は街中に打ち捨てられた。死体を野良犬やネズミが喰いあさる。

死はどこにも転がっていた。黒死病に限らず、戦争、飢餓、地震、火山の爆発と、死は日常茶飯事であった。生きることは苦悩の連続であり、人々は希望のない日々を送っていた。人生は苦悩と悲しみと絶望の連続であった。逃れようのない世界の終末の中で享楽的な生に溺れる人々に、説教師は繰り返し説いた。「メメント・モリ（Memento mori）—死を想え」と。ブリューゲルの『死の勝利』は西欧の死の伝統を描写したものに相違なかった。

デューラーにしばらく圧倒された後、わたしは再び異様な作品の前に立ち止まった。作品の題は『人生の三段階と死』。作者のハンス・バルドゥンク・グリーンは、デューラーの弟子である。

この作品は人が死神に引かれていくさまを描いたものという。

大地はひび割れ、枯れ木に憂鬱な月の光がわずかに降り注ぐ中、地面に幼児が眠っている。しかしその左手は死神の大鎌に触れており、生まれ落ちた時からすでに死が暗示されている。幼児はやがて豊満な成熟した乙女に成長するが（画面左）、それも一瞬のこと。乙女

の右肩とローブはしっかりと老婆（画面中央）につかまえられている。若く美しかった乙女もすぐに人生に疲れ頬こけた老婆となる。「幼児→乙女→老婆」の三段階は一瞬の間である。老婆もまた左の腕をしっかりと死神に（画面右）捕まえられている。死神は砂時計を見ながら老婆の余命をカウント・ダウンしている。死神は人の命の短さをあざ笑うように笑みさえ浮かべている。幼年、成年、老年と人は確実に死に向かっている。時の流れは砂時計のようにサラサラと早く、誰にも止めることはできない。

——わたしに残された砂時計——

1347年、イタリアに上陸した黒死病は約300年という長い間にわたり全ヨーロッパを荒れ狂った。突然襲いくる死の恐怖。人々は死の足音を聞き、次は自分の番かと恐れおののいた。いつ自分の肩に死神の手がのびるか。人々はつねに生死の極限状況下にあった。その恐怖は今のわれわれの想像を超えるであろう。

死を考えすぎるのは不健康だが、死を全く考えないのも思想的には不健全である。全く考えないのでは、われわれの人生は動物と異なるところはない。折りにふれ死を想わぬ者はどこか未熟だし、さらにいえば信頼できない。プラド美術館で久方ぶりにわたしは死を想った。

闇があつての光であり、光あつての闇であるように、メント・モリはまた「生を忘れるな」のメッセージでもあるだろう。「よりよい生を生きよ」のメッセージでもあったろう。ビジネス世界に生きる者にとって、時折死を想うことは人生の解毒剤でもある。思えばこの10年、わたしも生きるのに忙しく死など他人事のように思っていたのだ。ビジネスという欲望と打算の世界のただ中で、多国籍企業の先兵として働き続けてきた。思想的にはわたしの40代は怠惰に流れた10年だった。圧倒的時間をビジネスに費やし、ビジネス仲間と付き合い、ビジネス書しか読まない生活の連續であった。アウレリウス帝の『自省録』にもごぶさただし、宿願の『幸福論』も書き散らしのまま、哲学書、宗教書をひもとく暇もない。このような生き方を続けてよいのか？

プラド美術館からホテルへの帰りの並木路。観光客が楽しげに語りながら通り過ぎる。そこには死の片鱗もない。ふとわたしは自分の来し方と残されている砂時計の時間を想った。そして妻と娘と息子たちの砂時計を。家族の砂時計はどれだけ残っているのだろうか……。夏の陽光の裂け目に一瞬蒼ざめた馬を見た気がして、わたしは戦慄を覚えた。